

家族機能が個人の自尊感情に与える影響について

C03083 平川瑞希

研究史・目的

自分の持っている能力や他人からの評価によって「私はこのままでよい」と自分をおもひのままに受け入れる肯定的な態度のことを自尊感情という。自分自身の能力などを適切に評価して受け入れることは、他人と比べることなく自分の中の価値をもとに物事を判断することに繋がり、人間関係を円滑に築くことや仕事上でも非常に重要なものとなる。この自尊感情は、家族や友人など重要な他者との関係が大きくかかわっている。中でも家族は生きる上で最も身近な存在であり、発達過程にある子どもにとっては非常に大きい影響を及ぼすとされている。宮代・岩岡(2021)の調査によれば、家族間の関係が強く、家族の統合がされている家庭で育つ子どもほど自尊感情が高いという結果が得られている。そこで本研究では個人の自尊感情に影響を与えるものとして家族が持つ機能に着目し、そこから家族がどのような状態であれば個人の自尊感情が適切なものになるのかを研究することを目的とする。

☆自尊感情測定尺度 (Rosenberg's Self Esteem Scale:RSES) について

ローゼンバーグ(Rosenberg)は自尊感情を「ひとつの特殊な対象、すなわち自己(the self)に対する肯定的、または否定的な態度」と捉え、自尊感情尺度(Rosenberg's Self Esteem Scale:RSES)を開発した。ローゼンバーグは自尊感情に二つの側面があると指摘しており、一つは個人が自分は「とてもよい(very good)」と感じる面で、もう一つは自分は「これでよい(good enough)」と感じる面である。RSESで測定する自尊感情は後者の「これでよい」と感じる程度である。

☆家族機能測定尺度 (FACEIII) について

オルソンは家族機能を評定するためには凝集性・適応性・コミュニケーションの三つの概念が重要であるとして、この次元にもとづいて円環モデル(circumplex model)を開発した。家族凝集性とは、どの程度家族同士でコミュニケーションをとっているのかなど、家族成員がお互いにもつ情緒的なつながりのことを指す。家族適応性は状況的・発達の危機に直面した時に家族システムの勢力構造や役割関係、ルールなどを変化させる能力のことを指す。この家族凝集性と家族適応性は互いに独立したものだと考えられており、それを測定するために開発されたのが家族機能測定尺度(FACE III)である。

円環モデルでは、凝集性・適応性の各次元を低いレベルから高いレベルまでの4段階に分け、これらを組み合わせて家族を16のタイプに分類する。さらに、この16タイプの家族は、凝集性と適応性のバランスの度合いによって①バランス群②極端群③中間群の3グループに分けられる。バランス群には、家族機能が最も働く健康的な家族が置かれ、極端群では統合失調症や神経症患者、アルコール依存症で治療を受けている(受けていた)者がいる家族が置かれる。

方法

調査時期:2023年10月初旬 調査内容:質問紙調査(10分程度)

調査対象者:千葉県内の大学生98名(女性50名・男性36名・その他1名・無回答4名・平均年齢21歳)

使用尺度:家族機能測定尺度(Olson, 1985) ローゼンバーグ自尊感情測定尺度日本語版(桜井, 2000)

結果

オルソンの円環モデルに基づいて得られたサンプルを群分けして相関分析、有意な結果が見られた群に対しては単回帰分析を行う事とした。(①バランス群②中間群③極端群④群に分けない全体群)しかし、有

意な結果が得られたのは極端群と全体群のみであった。

①全体群についての相関分析と単回帰分析

～相関分析～

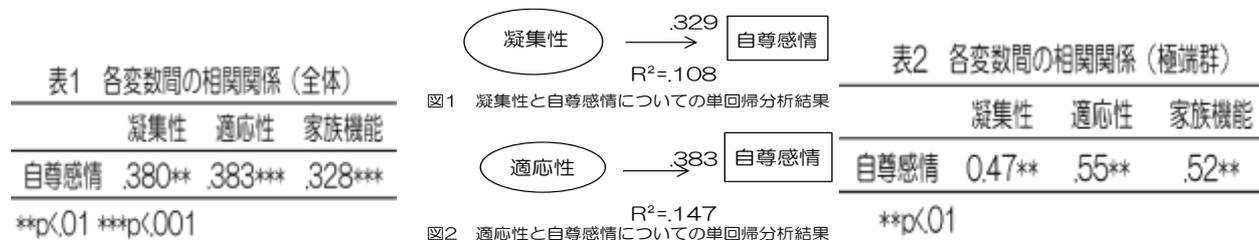
凝集性と自尊感情の間では $r=.33, p<.01$ という、弱い正の相関が見られた。適応性と自尊感情の間では $r=.38, p<.001$ という弱い正の相関が見られた。家族機能と自尊感情の間では $.38, p<.001$ という弱い正の相関が見られた(表1)。

～単回帰分析～

同一尺度の下位尺度である凝集性と適応性は相関が高かったため、多重共線性を考えて分析は別々に行った。従属変数を自尊感情、独立変数を凝集性として単回帰分析を行った結果、有意な偏回帰が見られ、決定係数は 0.108 であった。従属変数を自尊感情、独立変数を適応性として単回帰分析を行った結果、有意な偏回帰が見られ、決定係数は 0.147 であった(図1、2)。

②極端群についての相関分析

自尊感情と凝集性の間には $.47(p \text{ 値}=.0094)$ という正の相関が見られた。自尊感情と適応性の間には $.55(p \text{ 値}=.0015)$ というやや強い正の相関が見られた。自尊感情と家族機能の間には $.52(p \text{ 値}=.0032)$ というやや強い正の相関が見られた(表2)。



考察

全体群の結果から、家族との情緒的な関りが強く、家族間で自分がやるべきことに柔軟に対応できているほど自尊感情が高いということが確認できた。凝集性が高い家庭で生活すると、家族との密接な関係の中で「自分が大事にされている」「理解してもらっている」と感じ、自分の存在価値を実感する機会が増えるとともに固定された家族の役割にとらわれずに臨機応変に役割を担当し、その都度役割を果たすことによって自身の能力に自身が持てる。その為、家族の凝集性と自尊感情が高いと個人の自尊感情が高くなるのだと推測される。

極端群の結果から、家族がお互いに無関心であったり家族間の役割が決まっていたり自分のことしかやらないなど、凝集性と適応性の両次元とも極端であれば自尊感情が低いことが確認できた。家庭内で自分を気にかけて大切にしてもらった経験や、家族の為に普段はやらない家事などをして感謝される経験などが少ないために自尊心を育む機会に恵まれないことが原因だと考えられる。

今後は多様な特徴を持つサンプルを十分確保し、サンプル数を増やして検討することが求められる。

引用文献

- ☆ Olson, D.H., Portner, J. and Lavee, Y. (1985) *FACES III: Family Adaptability and Cohesion Evaluation Scales*. St. Paul: Family Social Science, University of Minnesota.
- ☆ Rosenberg, M. (1965) *Society and the adolescent self-image*. Princeton University Press.
- ☆ 宮代こずゑ・岩岡紗希 (2021) 大学生の自尊感情と親の養育態度の関連. 宇都宮大学共同教育学部研究紀要. 第71号. 別冊.